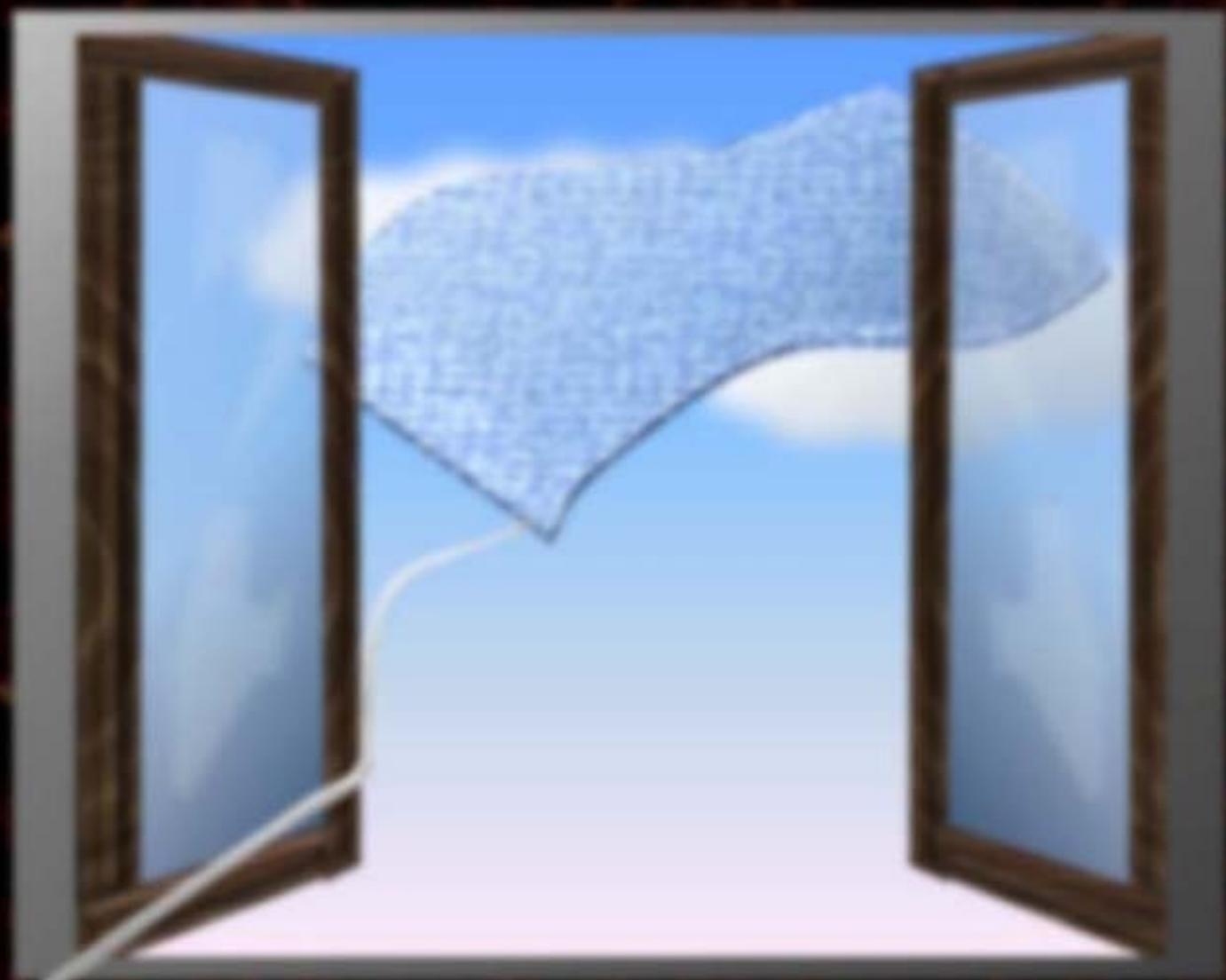


週刊

夢の窓

No.11



むうにい

ウルトラの実

小学生の男の子がタッタタッタと駆けてきたかと思うと、いきなり、コンクリート塀の前でズボンを下ろし始めた。

「こらあっ、そんなところでオシッコしちゃダメだよ！」わたしはびっくりして注意をする。「ほら、すぐそこにコンビニがあるから、おトイレ貸してもらえば？」

男の子は振り向いて言い返す。

「出ちゃったもーん。もう誰にも、おれ様を止めることなんて出来やしないよーだっ！」

そして、気持ちよさそうにチョロチョロと用を足すのだった。

「うわ、憎ったらしい。大事なトコつまんで、輪ゴムで止めちゃうゾ」大人げもなく、カッとするわたし。けれど、もっと大変なことが起きた。

コンクリート塀からニョキッと手が生え、足が出て、ゴゴゴッと立ち上がったのだ。

「ぬりかべ〜（だれだあ、わしに小便をかけたのはあ〜）！」

男の子はオシッコを止め、ズボンをずり落としたまま後ずさりをする。

「まずいっ、妖怪ぬりかべが化けて出た！」わたしはとっさに男の子に駆け寄ると、小脇に抱きかかえ、逃げ出した。

「ぬりかべ〜（待てえ〜）！」

ズシン、ズシンと地響きを立てて、ぬりかべが追いかけてくる。

「うわあん、怖いよおーっ」泣きわめきながら、手足をバタバタさせるので、走りにくいったらない。

「ちょっとお、大人しくしてったら。道端に落としちゃうじゃないっ」

あんな重そうな図体をしているくせに、案外足が速い。油断をしていると、そのうちに追い付かれてしまいそうだ。

いつか読んだ「妖怪大百科」に、ぬりかべに追われたときの対処法があったことを、電撃のように思い出す。

わたしは立ち止まり、ぬりかべに向かって叫んだ。

「ねえねえ、隣の家で困りが出来たんだってね！」

妖怪ぬりかべは、律儀に返してくる。「ぬりかべっ（へえっ）！」

「それっ、今のうち」わたしはまた走り出す。ぬりかべが我に返った時、わたしと男の子はすでに、公民館の中へ隠れていた。

「ぬりかべーっ（よくも、騙したなーっ）！」

ぬりかべはカンカンに怒って、見る見るうちに体を巨大化させていく。しまいには、ビルと変わらないほどに膨れ上がっていた。

通行人達がぬりかべを指差して、口々に騒ぐ。

「なんなの、あれ？」「怪獣っ？」「新築のビル、ってことはないよなっ？」「でっかい餅じゃねえの？」

わたし達は窓からその様子をうかがいながら、ガタガタと震えていた。

「どうしよう、町が壊されちゃう」

「ママ～、怖いよお～」男の子は飽きもせず、泣いている。

ふと、公民館の中に設置された自動販売機に目が行く。缶飲料に混ざって、箱物が売られていた。「ウルトラの実」と印刷されている。

「なんだろう、これ……」今はこんなことをしている場合ではないはずだが、ポケットから財布を取り出して、小銭を販売機に入れていた。

「あっ、それって、土に埋めると、『ウルトラマン』が生えてくる実だよっ」けろっと泣き止むと、目をきらきら輝かせながら、男の子が教えてくれた。

「そうなの？ そりゃあ、助かる」さっそく、種を庭に蒔いてみた。

何も起きない。

「水をまかなきゃ」と男の子。

水汲み場を求めて、あたふたとしていると、

「しょうがないなあ。おれがするよっ」そういって、種を埋めた場所にまたオシッコをする。「さっき、全部出し切れなかったの……」

種は芽を出し、すくすくと成長していった。

あっという間に大きくなると、足に生えた根を引き抜きながら、ぬりかべに近づいていく。

両者の間で、空気が張り詰めた。

「シュワッチ（なあ、ぬりかべさんよ）」頭にツタを絡みつかせ、ウルトラマンが話しかける。

「ぬりかべ～（なんだ、ウルトラの～）」ぬりかべが答える。

「シュワッチ（ここは1つ、停戦としないか）」

何と、ウルトラマンのほうから停戦を呼びかけてきた。

「ぬりかべ～（そうだな、そうすっか。お互い、臭い仲になったことだし～）」

こうして、町に平和が戻ってきた。

怪談をする

桑田孝夫と志茂田ともるが遊びに来ている。

「ふうーん、けっこう片してるじゃねえか」桑田は、辺りをきょろきょろと見回しながら言う。

「部屋をきれいにしておくと、お金が貯まる、などと昔から言いますねえ、むうにい君」感心なことだ
というように、志茂田もうなずいた。

「そうなの？ あいにく、うちじゃこんなものしか出ないけどね」

わたしは、缶コーヒーとエクレアを載せたトレーをテーブルに置きながら言う。

ネットで話題になっている「巷の噂話」をきっかけに、桑田がこんなことを言い出した。

「そう言えば、おれらの小学校って、終戦直後は死体置き場だったらしいぜ」

志茂田も人差し指をぶんぶん振りながら、

「そうそう、わたしも祖母から聞かされましたよ。それこそ、山のように積み上げられていたそうで
すね。夏場だったから、たちまち腐って、町内を異臭が漂ったといいます」

そんな怖ろしい話、今の今まで知らなかった。

「その死体はどうしたんだっけ？」桑田が聞いた。

「油を撒いて燃やしたんですよ、桑田君。骨はまだ、校舎の下に埋まったままだですよ」

いつの間にか怪談大会になっていた。

「残業で終電ぎりぎりになっちまったんだけどよ」何度も聞いた、桑田の恐怖体験だ。「駅からうちま
での間に、小さな墓地があるだろ？ その前を通り過ぎたとき、いきなり肩をつかまれてな、そのまま
後ろにずでんと転けちまったんだ。振り返ったが、誰もいやしねえ。後にも先にも、あんな怖ろしい
目に遭ったのは初めてだぜ」

続いて志茂田が、持ち前の落ち着いた口調で語り出す。

「明治の初め、とある農家での話ですよ。夫婦には娘がいたのですが、流行病にかかり、わずか2歳で
亡くしてしまいましたね。葬るとき、生まれ変わってもわかるように、足の裏に墨で子供の名前を書い
たんですよ。せめてもの思いだったんでしょうねえ……」

わたしと桑田はごくりと唾を飲んだ。

「数年ばかり経ちまして、飼っている牛に、仔が生まれましてね。まるで実の子のように可愛がったと
います。けれど、不運は続くものですねえ。ちょうど2年目に、ぽっくりと死んでしまいました。奇
しくも、その日は娘の命日だったといいます。その時、夫婦は初めて目にしたんですよ、牛の足の裏
を――」

わたしの背中を、ゲジゲジの群が走り抜けていった。桑田も顔色がない。

「さて、むうにい君。次はあなたの番ですよ。どんな話を聞かせて貰えるんでしょうねえ」

わたしは困ってしまった。恐怖体験どころか、そもそも怖い話などあまり知らないのだ。

「ほら、何かねえのか。人魂を見たとか、UFOにさらわれたとかよ」桑田までもが無茶を言う。

他に思い浮かばないので、子供の頃に見た夢を話すことにした。

「ばかばかしい夢だけど、いい？」わたしは一応、確認する。

「話してみ、どうせ夢なんだし」と桑田。

「どうぞ、どうぞ。ささ、お話してください」

わたしは話しはじめた。

壁も天井も、そして床までも真っ白い部屋にわたしは立っていた。

真正面に窓があるらしく、ぼんやりと光が差している。けれど、パーティションで区切られていて、カーテンが閉まっているのだ。

カーテンの前まで行き、手をかける。

その時、頭の中ではっきりと声が聞こえた。

「開けてはならない」と。

どうしようかと躊躇したが、勇気を振り絞って、カーテンを引く。

凄まじい叫び声がわたしの耳を貫いた。自分自身の声だった。

「ねっ、全然怖くなかったでしょ？」話し終えて、わたしは2人を見た。

桑田も志茂田も、口を半開きにして、まるで凍りついたかのような表情をしている。

「お、おれ、帰るよ……」やっとの事で桑田が口を開く。

「わたしも、これでおいとまさせていただきますね」志茂田までもが、よろよろと立ち上がる。

「どうしたの？ ねえ、ねえったら」わたしは落ち着かなくなった。

玄関を出る時、桑田は振り返りもせず、こう言った。

「お前……それ、夢じゃねえよ」

古くて新しいショッピング・モール

わたしの町にも、ショッピング・モールがオープンした。

一昨年、隣町にイオンが出来たときは、負けたような気がして、何だか悔しかったっけ。

エコ・バッグを肩から提げ、モールに向かって歩いていると、後ろから友人の桑田孝夫が声を掛けてきた。

「よおっ、むうにい」

「やあ、桑田も行くの？」わたしは聞いた。

「ああ、なんつったって、町内で最初の大型施設だしな。オープン・セールで安売りしてたら、何か買っていこうかな」

入り口付近の道路は、すでにながやがやと大混雑をしている。

「さすが初日だね。混んでるなあ……」中へ入るのがためらわれた。

「とにかく、見るだけは見てみようぜ。せっかく来たんだしな」桑田はそう言うと、わたしの手を引っ張って人混みをかき分けていく。

おかげで、離ればなれにならずに済んだ。

店の中に入ったわたし達は、呆気に取られてしまった。

「めちゃくちゃ広いね……」とわたし。

「ああ、だけど、これ以上ないってくらい、小汚いねえな……」

その後続く言葉も思い付かず、ばかみたいに2人して立ちつくす。

広さに関しては申し分がない。隣町のイオンが、そっくり2つは収まりそうだ。

ところが、どの店舗も、使い古した板塀やら、ブリキの板などで組まれている。陳列棚には、ミカンの木箱やすり切れた段ボール箱が使われ、おまけに照明は、いまどき裸電球だった。

そんな装いにも構わず、大勢の買い物客で賑わっている。何十年も昔の闇市でも見ている気がしてきた。

「もしかしたら、こういうのが最新のトレンドなのかも知れないね」自分で言っておきながら、それは、と心の声が反論をする。

「これがトレンドねえ。そりゃあ、お前。歴史は繰り返す、とは言うけどもよ、いくらなんだって、戻り過ぎやしねえか？」

おもちゃ売り場には、「最新のポータブル・ゲーム」が並んでいた。

映像がぼーっと立体的に浮かび上がっている。ただし、モノクロのドット・キャラだったけれど。

「3Dってだけで、あとはファミコンにすら負けてるね」こんな物、いったい誰が買うというのか。

ペット・ショップのケージにいるのは、どれも見慣れない生き物ばかりだった。

「なな、むうにい。『クモネコ』って何だと思う？ ほら、ここに札が掛かってるだろ」桑田はかがん

だま、空っぽの水槽を覗き込んでいる。

「たぶん、桑田の背中を這い回っている、そのちっこいのじゃないかなあ」

手の平ほどの毛むくじゃらの動物が、シャツにたかっていた。仔猫にそっくりだけれど、それにしても脚の数が多すぎる。

背中を見ようと首を回した桑田とクモネコとが、面と向かい合った。

「う、うわっ！」桑田が素っ頓狂な声を張り上げる。「取ってくれ、頼むよ、むうにっ！」

「なんだい、怖がりだな、まったく」わたしはクモネコをひょいとはらきとつまんで、元の水槽に返してやった。

。

「おれ、クモとかそういうの、大っ嫌いなんだ」

屋台のような八百屋で、チョコバナナを売っている。気分直しに、わたしはそれを2本買い、桑田にも分けてやった。

「これでも食べて、ちょっと落ち着くといいよ」

「おう、サンキュウ……」チョコバナナをぱくっと一口食べるなり、言いようのない、奇妙な顔をする。

。

「何？ どうしたの？」わたしも嚙ってみた。「うっ……」

「なっ？ 言葉にならねえ味がしたろ」

魚肉ソーセージに餡こを混ぜて、さらにのり塩ポテチふうにした、そんなバラエティに富んだ味がした。

「チョコレートだけは本物だよね」わたしは用心深く、ぺろっと舐める。

桑田は涙目で言った。

「ああ、おかげでダメージ倍増だになっ」

太陽チューブの危機

太陽と地球とは、細いチューブでつながっている。太陽で作られた酸素は、このチューブを通して、地球へと運ばれていた。文字通り、ライフラインなのである。

小学校の授業で真っ先に習うので、誰にとっても「当たり前」のこととして、認識されていた。

その太陽チューブに危機が迫っているという。

もう間もなく、太陽と地球との間を金星が通過する。その際に、この太陽チューブを引っ掛けてしまふかもしれない、とNASAが世界に先がけて、日本国内で発表したのだ。

列島中が大騒ぎになった。

「大変だ、そんなことになったら、地球に酸素が来なくなる」

「酸素がなくなるだって？　じゃあ、これからは何を吸って生きていけばいいんだ」

「そうだ、植物だっ。植物は酸素を作るらしい。よし、さっそく花屋へ行って、買い占めだ！」

街じゅうの花屋という花屋に人が殺到し、瞬く間に売れ切れてしまう。

花屋から花が消えてしまうと、今度は観光地へと大勢、押し寄せた。土産物屋で売られている、「ご当地の空気のカンヅメ」が、飛ぶように売れていく。

「ご当地の空気のカンヅメ」の卸業者は、急遽、バキューム・カーをレンタルして、手当たり次第に空気を集め出す。

それに対して、地元の市民団体が、「空気の独占に抗議する」というプラカードを持って、大規模なデモを行うなど、各地で混乱が広がっていった。

テレビでは、連日、国会中継が放映され続ける。

「消費税増税はやめて、空気に税金を課するという案はどうか」そんな意見が飛び交い、真剣に議論されていた。

民放のコメンテーター達が、

「どんな状況であれ、空気は人類の共有物なんだからさあ、これに税を掛けちゃあ、だめだよ。オレはやだね、そんな法案」

「いや、そうは言いますが、現状をご覧ください。町中では、子供さえもビニール袋を振り回して、空気を『乱獲』してるじゃないですか。へたしたら、太陽チューブ切断の前に、地球から空気がなくなってしまうですよ」

のんびりと構えていられるほど、わたしは人間が出来ていなかった。

「どうしよう、どうしよう。このままでは空気がなくなっちゃう！」

財布を引っつかむと、近所のドラッグ・ストアへと駆け込む。確か、スプレータイプの携帯酸素があったはずだ。

幸い、ドラッグ・ストアはさほど混雑をしていなかった。携帯酸素のことに、まだほとんどの人が気づいていないらしい。

わたしは、10本ばかり、まとめ買いをした。これで、当面をしのげるだろう。

家に戻って、さっそく1本吸ってみた。

さわやかなスズランの香りが、鼻腔に広がる。

「いい匂い……。気持ちが洗われるよう」

体から力がみなぎってきた。まるで、生まれ変わったかのようなのである。

鏡を覗くと、気になっていたホクロが1つ残らずなくなっている。黄ばみ、匂いがすっかり消えて、まぶしい白さで輝いていた。

「これが酸素パワーかぁ」感激し、改めて携帯缶を見つめた。「酵素」と書いてある。

あれれ、買い間違えちゃった……。

空飛ぶバイクに乗って

近所のディスカウント・ショップで、「空飛ぶバイク」を売っていた。

パッと見た感じ、ハーレー・ダヴィッドソンの883にそっくり。

「あの、すみません」さっそく、そばを通りかかった店員に話しかけてみるわたし。「これって、普通のバイクっぽいんですけど、ほんとに空を飛べるんですかあ？」

店員はにっこり笑って、

「はい、飛びますよ。仕組みまではわからないんですけど、確かに飛ぶんです」

「ふーん。あ、でもバイクの免許、持ってなかったんだっけ……」こちらから尋ねておきながら、肝心なことを忘れていた。これでは、まるで冷やかashiである。

「ああ、それなら大丈夫です。今の道交法に、『バイクで空を飛ぶのは禁止』なんて規制はありませんから」

「そうなんですか。じゃあ、買っちゃおうっかな」

値札を外してもらい、店の外まで押し歩きをする。大きなバイクなので、さすがに重い。けれど、飛んでしまえばどうってことはないのだ。

「飛ぶときは、ニュートラルからローにギアを入れてくださいね」店員が操作方法を説明してくれる。「全部で20速まであります。1速ごとに、高度が100メートルずつ上がっていきます。慣れないうちは、あまり高くまでのぼらないでください。空気が薄くなりますから」

タンクにお買い上げシールを貼ったまま、わたしはバイクにまたがった。

「ガソリンはレギュラーでいいですよねっ？」最後に、そう確認をする。

「高度2000メートルを飛ぶときは、ハイオクのほうが燃費がいいんですけどね」と店員。

アクセルを開くと、次第に車体が軽くなってきた。

おぼつかない操作で、ギアをどんどん上げていく。その度に、ドキューンッと100メートルずつ跳ね上がる。

「おーっ！」そんじょそこらのジェット・コースターなど、目じゃない。

気づけば、街をはるか下に望みながら、猛スピードで飛んでいた。

とりあえず、東へ向かって飛ばしてみる。この場合の「飛ばす」は、文字通りの意味だった。

凄まじい風圧を感じながらも、この上なく快感である。

やがて太平洋に出て、しばらくの間、どこまでも広がる海の上を突き進む。

そのうちに島影が見え始めた。頭の中の地図では、ハワイ辺りだったが、それにしても大きい。島と言うより、大陸と言った方が正確かもしれない。

「もしかすると、噂に聞く『ムー大陸』かもしれないな」わたしは胸が熱くなった。これまで、誰も発見できなかったのに、今さっきディスカウント・ショップで衝動買いした「空飛ぶバイク」で、あっさり行き着いてしまったのだから。

ギアを徐々に落としていき、わたしは大陸へと降り立った。

バイクを町外れに止め、しっかりとハンドル・ロックする。盗難にでも遭ったら大変だ。

町並みは、阿佐ヶ谷辺りとほとんど見分けがつかない。気がつかないうちにUターンして、日本に戻ってしまったのではないか、そう勘違いしたほどだ。

「あの、ここって、『ムー大陸』で合ってますよね？」通りを歩く人に尋ねてみる。

買い物帰りの主婦らしい人が、親切に答えてくれた。

「ええ、そうですよ。あの有名な『ムー大陸』なんです。あらあら、とうとう外国の方に見つかってしまったわね、ほほほ」

商店街を歩き回るうち、耳寄りな情報を入手する。

この国では、「働けるのに働く気のない者」、「自分さえよければいい者」、それに「人が見ていなければ、何をしてもいいと考えている者」に、「特別配給」が支払われるというのだ。

「でも、それっておかしくないですか？」わたしは言う。

「そう？」噴水広場つまらないパフォーマンスをしていた大道芸人が絡んできた。「もらえるんもんももらって、いったい何が悪いのかなあっ？」

そう言われると、こちらとしても返す言葉がない。

それなら、わたしもその「特別配給」というのを受けておこうかな。そう考えなおした。

それにはまず、国籍を取得しなくてはならない。

「国籍を取るには、どこへ行ったらいいんですか？」大道芸人に聞いた。

「ああ、それなら、そこの角を曲がってすぐのところの役場がある。17番窓口が確か、外国人登録受け付けになってるよ」

「ありがとうございます」

立ち去ろうとしたわたしを、大道芸人が呼び止める。

「『特配』はいいもんだけどさ、1つだけ気をつけなくちゃならないよ」

「はい、なんでしょう？」

「タンメン好き？」と大道芸人。

「ええ、そりゃあもう」思い浮かべただけでお腹がぐう〜と鳴る。

「残念だな、食うの禁止なんだ」

「はっ？」

「配給をもらってる者は、あれ食っちゃいけないことになってんだよな。で、代わりにウレタン製の『ウレタン麺』が出てくるんだ」

どんぶりに入ったウレタンの麺を想像し、ぶるっと身を震わせる。

「じゃあ、やっぱり『特別配給』なんかいらない。それに、この国はもうたくさんっ！」

わたしは街を後にすると、「空飛ぶバイク」に乗って、もと来た空へと飛び立った。

電子レンジ、禁断のボタン

志茂田ともるの家に遊びに行く。

「やあ、どうもどうも。よく、来てくれましたね、むうにい君」ドアを開けて出むかえてくれた志茂田を見て、わたしは驚いた。

「わあっ、ちょっと見ない間に、ずいぶんとずんぐりしちゃったねっ！」

志茂田はわたしを部屋へと案内しながら言う。

「あっはっはっ。そうなんですよ、むうにい君。不摂生がたたって、こんな様になりました」

それにしたって太りすぎだ。どう控え目に見ても、最後に会ったときより、横に3倍半は膨れている。

「何て言うか、もうぶよん、ぶよんっていう感じだよ。ほら、『不思議の国のアリス』に出てくる、ハンプティ・ダンプティみたい」

ここまでの言われように、さすがの志茂田も気分を害したらしく、

「もう、それ以上は言ってくれなくていいですよ、むうにい君。わたしだって、ただ手をこまねいているわけではないのです」

「運動でも始めたの？」わたしは聞いた。

「いえいえ。まずは食生活から、と思ひましてね」どっかりとソファーに腰を下ろす志茂田。ずぶん、と沈み、床がみしみしと鳴く。「冷蔵庫を見てきて下さい、むうにい君。パック入りのピザが入っているはずですよ。そいつを、わたしとあなたの分、レンジでチンしてきてもらえませんか」

食事制限をしているといいながら、ピザだって？ 志茂田って案外、抜けてるんじゃないだろうか。

冷蔵庫を開けると、ピザが山のように詰め込まれている。パッケージには「ダイエット・ピザ」とあった。

「何分、温めたらいい？」居間に向かって声を掛ける。

「5分で頼みますよ、むうにい君。それ以下でも、それ以上でも困ります」

そう返事が返ってきた。

「ダイエット・ピザねえ。食べなきゃ、すぐにでも痩せると言うんだけどなあ……」小声でつぶやきながら、レンジにピザを入れる。

調理時間を設定し、スタート・ボタンを押そうとした時、すぐ脇に怪しいボタンを見つけた。飛べない鳥の絵柄が印刷されていて、小さく「押すなよっ、絶対に押すなよ？」と書かれている。

「何、このボタン」押すなと言われると、かえって押したくなってしまう。それが人間の不思議なところだ。

わたしは、禁断のボタンに指をかけた。

「言い忘れていました、むうにい君」奥から志茂田が声をかけてくる。「レンジにある、見慣れないボ

タンには決して触れないで下さいね」

おっと！ 危ない、危ない。もうちょっとで押すところだった。

「うん、わかってるって」

今度こそ、スタート・ボタンを押す。

いや、自分ではそのつもりでいたのだが、うっかり、その隣のボタンを押していた。

「押すなよっ、絶対に押すなよ？」ボタンだった。

「あ……」と、思わずわたし。

「どうしました、むうにい君？」

「えっと、あのうー」

窓の外から、派手な爆発音が、連続して起こった。加熱しすぎて、袋ごと破裂させた冷凍グラタンの時にそっくりだ。

「これはこれはっ！」志茂田の叫ぶ声に、わたしも窓へ駆けていった。

「あーあ、すごいことになってるねっ」

街じゅう、どこもかしこもチーズとソーセージ、アンチョビ、コーンでグチャグチャになっていた。

熱々のピザを頭からかぶった通行人が、わたし達を見あげて、大声で怒鳴っている。

「やいっ、殺す気かあーっ！」

人生失敗のニュース、世界中を駆ける

腐れ縁の桑田孝夫から、メールが届く。

〔ツイッター始めたんだってな。ああいうもんは、ぶっ飛んだことをつぶやくもんなんだぜ。知らなかったろ？〕

なるほど、そうかもしれない。「今日はオムライスを食べた」とか、「東京スカイツリーの前なう」なんてつぶやいたところで、誰の得にもならないよなあ。

〔見ててごらん、あっと驚くようなつぶやきを発信してみせるから〕

わたしは桑田にメールを送った。

パソコンの前で小一時間ばかり、頭を捻る。

〔人生、失敗しちゃいました(。_。)てへっ。これからTシャツ1枚でエベレストに登ってきます
ε=ε=(ノ`Д´)ノ〕

みんな笑ってくれるかな、そう思いながらツイート・ボタンを押した。

すぐさま、返事が返ってくる。

〔失敗したんなら、そりゃあエベレストくらい登らなくちゃな〕
〔言った以上、必ず実行しろよ〕
〔エベレストは意外と寒いぞ。もう1枚、羽織ってけ？〕
〔NHKに連絡済み。ヘリが中継に向かうってさ〕
〔ヒラマヤって10回言ってみそ。じゃ、質問。世界一高い山は？〕

しかも、やり取りのすべてをリツイートされていて、気がついたら世界中がわたしに注目している。本当に、Tシャツ1枚でエベレスト登頂を目指すと思われるらしい。

わたしは大慌てで、つぶやき直す。

〔うそです、さっきのはうそなんです。だから、もうこれ以上、世界中に拡散するはやめて下さい〕

しかし、弾みがついて、もう誰にも止められない。その気もないようだ。

〔エーベレストっ！ エーベレストっ！〕
〔はよ行かんかい、ボケがっ〕
〔登ったら、もう降りてくんなよ〕

携帯にメールが来る。桑田からだ。

〔お、むうにい。今よ、ツイッターにトンデモなつぶやきをしてるバカがいるぜ。ウソだと思ったら、見てみ。なんでも、人生に失敗したんで、これからエベレストに登るらしいぞ〕

くうっ……。元はと言えば、桑田のせいなのに！
わたしは、メールを打って返した。

〔よかったら、そのほかと一緒に登ろうよ、エベレスト〕

週刊 夢の窓 No.11

<http://p.booklog.jp/book/87568>

著者 : mueny

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/mueny/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/87568>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/87568>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ